

メディアの機能は言語使用をどのように変えるか？

ーLINE チャット・携帯メール・対面会話における終助詞の使用と不使用を例にー

落合哉人(筑波大学大学院生)

1. 研究の位置付け

コンピューターや携帯電話等を介した言語使用について、Herring(2007)は大きく、メディアの機能に規定される側面(方向性、記録性、使用可能なモード……)と、その機能を用いる際の状況に規定される側面(参加者の数、属性、目的……)があることを論じている。本研究は、特に前者に着目しつつ言語使用が具体的にどのように変わるか検討するものである。研究の対象として、2000年代以降の日本国内で広く普及したコミュニケーション系メディアである携帯メールとLINE(特にそのチャット機能)を取り上げ、終助詞の使用(または不使用)の観点から両者における言語使用を分析する。

携帯メールは2000年代前半～中頃を中心に(三宅, 2005; 佐竹, 2005 等), LINE は2010年代後半を中心に(加納ら, 2017; 岡本・服部, 2017 等)それぞれ一定の分析があるが、①注目される要素に偏りがある点と②メディアの比較に不足がある点の2点に関して更なる検討の余地がある。①について、両者に関しては絵記号・スタンプ等の装飾的要素や(表記的側面も含む)特殊な語彙・表現から分析が進んできたが、一見して指摘しにくい、一般的な言語的要素の使用に関する特殊性に対しては関心が薄い問題がある。また、②について、携帯メールは2000年代の、LINE は2010年代の、日本語における「打ちことば」(田中, 2014)を代表するメディアと言えるが、前者と後者で言語使用がどのように変わったかということや、それは(音声発話を想定する概念としての)「話しことば」の変化とどの程度沿うものかということは実証的な検討に乏しい。本研究は(用いられることは指摘されるものの、どのように用いられるかは分析が乏しい)一般的な言語的要素として終助詞に着目するほか、対面会話の「話しことば」も調査対象に含めることで、ふたつの問題の克服をはかる。

2. 調査の対象と内容

本研究では、三宅(2006)が公開している携帯メールのデータ(343 談話/計 1920 発信/2120 ターン)と、筆者が独自に集めたLINE のデータ(66 談話/計 7963 発信/5127 ターン)を扱う¹。前者は2003年～2005年に東京の大学生から収集されたものであり、後者は2014年～2019年に東京・千葉・茨城の、大学生及び20代前半の社会人から収集されたものである。また、それらと概ね同時期の「話しことば」として『名大会話コーパス』(NUCC)に含まれる会話(8 会話/計 296 分/4567 ターン)と『日本語日常会話コーパス(モニター公開版)』(CEJC)に含まれる会話(7 会話/計 162 分/2747 ターン²)を扱う。NUCC は2001 年下旬～2003 年上半に収録された日常会話の書き起こしデータを収めたコーパスであり(藤村・大曾・大島, 2011), CEJC は2016 年以降に録音・録画された日常会話を収めたコーパスである(田中ら, 2018; 小磯ら, 2019)。本研究ではふたつのコーパスに含まれるデータのうち I) すべての参加者が10代後半～20代後半の東京方言話者であり、非初対面であること、II) 移動中や接客中ではないこと、III) ゴールが事前に設定されていないこと、の3点を満たす対面

¹ やりとりのある方を大きく特定の課題解決等、ゴールがあらかじめあるものと、ないものに分けると、携帯メールでは264 談話が前者に、79 談話が後者に、それぞれ該当し、LINE では26 談話が前者に、40 談話が後者に、それぞれ該当する。なお、携帯メールの談話1 件の長さは平均して3 往復程度である。一方で、LINE の談話はスマートフォンを用いたもののみを対象とし、スクリーンショットで20 枚程度のやりとりを集めた。また、携帯メールとLINE ともにターンは同一の話者が同一の話題に言及する範囲に基づいて数えた。たとえば(A)では、A、Bそれぞれが一度の発話で2 回ずつターンを獲得するものとみなした。これは、このような複数の話題の同時進行が基本的に生じない対面会話との比較を考慮する処理である(詳しくは、落合(2019)を参照されたい)。

(A) (出身高校の場所について | A が同級生に話しかけられないことについて)

A1: こちら田舎ですから (笑)
A2: 恥ずかしがり屋なんですよ
シャイボーイだから (笑)
B1: やーいやーい田舎者～
B2: がんばって (笑)

(LINE, 009)

² ターンはNUCC を基準に数えた。具体的には、NUCC においてあいづち相当の発話がターンとして記述されていないことを踏まえ、CEJC においても明らかにあいづちと思われる発話を除いた上、連続する同一話者の発話をまとめて1 ターンとして数えた。但し、NUCC でも一部、あいづちであるとは考えにくい発話(質問に対する応答等)があいづちとして記述される例が見られたため、会話の相手の後続する反応から明確なものに限り、人手で修正を行った。

会話をすべて対象とした³。なお、携帯メール及びNUCCではすべてのデータが1対1のやりとりであるのに対して、LINEでは66談話中27談話において、CEJCでは7会話中4会話において、それぞれ3人以上の参加者が関わっている。

調査では、以上の各データに含まれる終助詞のうち特に形容動詞を除く活用語（動詞・形容詞・助動詞）が主節の末尾で終止形として現れた際に後接するものを観察した⁴。その際、終助詞とみなす語は、国立国語研究所(1951)で言及される語とその複合形を主に取り上げたが⁵、何も付かない言い切りの終止形(0)も数えた。なお、携帯メールやLINEでは音調の違いを観察し難いことを踏まえ、音調の区別はすべてのデータで一律に措いた(同様に、延伸と非延伸も区別しない)。また、短い間に同じ形式が繰り返される場合(「あるねあるね」等)、終助詞及び前接要素の出現は一度のみと見なした。

3. 調査の結果と分析

表1 対面会話の主節末尾における活用語終止形に付加された終助詞の出現傾向

NUCC					CEJC				
順	語	用例数	割合	調整頻度	順	語	用例数	割合	調整頻度
1	0	1648	48.7%	36.1	1	0	735	42.0%	26.8
2	よね	573	16.9%	12.6	2	よ	308	17.6%	11.2
3	よ	460	13.6%	10.1	3	ね	217	12.4%	7.9
4	ね	356	10.5%	7.8	4	よね	179	10.2%	6.5
5	な	70	2.1%	1.5	5	か	88	5.0%	3.2
6	つけ	61	1.8%	1.3	6	つけ	64	3.7%	2.3
19	ぜ	1	0.0%	0.0	15	べ	1	0.1%	0.0
	0あり計	3387	100.0%	74.2		0あり計	1638	100.0%	63.7
	0なし計	1739	51.3%	38.1		0なし計	1016	58.0%	37.0

まず、NUCCとCEJCにおける終助詞の出現傾向を表1に示す⁶。表1から、終助詞が付いたものに限って見た場合、100ターンあたりで換算した全体的な用例数(以下、調整頻度)はほぼ同じであるが、終助詞が付かない言い切りの終止形(0)は調整頻度に若干の差があることがわかる。また、個別の語のうち相対的に出現が多いものでは、「よね」の調整頻度、順位に差があることが読み取れる。これを踏まえ個々の用例を詳しく見ると、0については特に形容詞「ない」に付く際に2倍以上の調整頻度の差が確認された(NUCC:4.5例/CEJC:1.9例)。一方で、そのような「ない」の中心的な現れ方はNUCC、CEJCともに「じゃない」の一部や補助形容詞として(1)のように何らかの認識への確認を求めるものである様子が見られた⁷。同様に、「よね」についても(2)のように全般的に何らかの認識について確認したり、確認を求めたりする形で観察された⁸。従ってNUCCとCEJCの間にある終助詞の出現傾向の違いは認識の確認という行為に依るところが大きいことが示唆される。但し、A)両者は概ね同じ状況でなされた対面会話であることと、B)一方で、やりとりに関わる人数に関しては違いがあることの2点を踏まえると、そのような確認のあり方の違いは聞き手の数に対応して生じる発話展開の特徴(どの程度細かく認識の共有を行いながら話を進めることができるか)を反映しているに過ぎない可能性も否めない⁹。

(1) (若者らしい言葉遣いで話すべきか否かについて)¹⁰

F147: 若者らしく。

F114: でも、うちら、(うん) 別に、ふ、普段からこうじゃない?

F147: <笑い> そうだよね。

F114: 何か、無理に若者にしなくてもよくない?

F147: そう、そう、そう。(うん) そうだよね。((後略))

(NUCC, 065)

(2) (地元にあった馴染みの駄菓子屋について)

古賀: 駄菓子屋さ: (0.382) かなりなくなったよね。

金子: やばいよね。

尾形: ないね。

金子: かなりやられてるよね。

尾形: うん。

(CEJC, T006_008a)

³ 対面会話のデータでゴールが事前に設定されるものを対象としないのは、NUCCにおいてそのような会話がほとんど見られないことに基づく。

⁴ 用例の抽出においては、全文検索システム『ひまわり』(NUCC: ver. 1.6.1/CEJC: ver. 1.6.4)及び形態素解析器MeCab(ver. 0.996)(辞書情報はUniDicを使用)を補助として用いた。なお、形容動詞は特に終止形の場合、「名詞+だ」との区別を明確に行えない用例が多いことから対象に含めなかった。

⁵ 禁止・命令・勧告を表す「な」及びその他の品詞と捉え得る「の」「のに」「たら」「けれども」「って」「て(で)」「てば」「が」「に」「ばこそ」「やら」は対象外とした。また、調査の都合上、複数の終助詞の複合と捉え得る「よね」「かな」等と単独で見られる「よ」「ね」「か」「な」等は別の語として数えた。

⁶ 表中の「割合」は出現数全体に占める割合を、「調整頻度」は100ターンあたりで換算した用例数を、それぞれ示す。これは後述の表2も同様。

⁷ 特にNUCCにおける音調の記述に起因して曖昧なものもあるが、NUCC、CEJCともに少なくとも「形容詞ない+0」の6割以上がそのような用例であった。

⁸ NUCCでは全用例(573例)中556例(97.0%)が、CEJCでは全用例(179例)中162例(90.5%)が、そのような用例であった。

⁹ 但し、データの母数に限りがあることから、確認に関わる発話の数と会話に関わる人数の相関はより広く検証する必要がある。

表2 携帯メールとLINEの主節末尾における活用語終止形に付加された終助詞の出現傾向

携帯メール					LINE				
順	語	用例数	割合	調整頻度	順	語	用例数	割合	調整頻度
1	〇	826	46.8%	39.0	1	〇	2295	62.5%	44.4
2	よ	349	19.8%	16.5	2	よ	351	9.6%	6.8
3	ね	174	9.9%	8.2	3	ね	204	5.6%	3.9
4	よね	85	4.8%	4.0	4	な	186	5.1%	3.6
5	な	79	4.5%	3.7	5	わ	166	4.5%	3.2
6	か	65	3.7%	3.1	6	よね	139	3.8%	2.7
27	わな	1	0.1%	0.1	26	わよ	1	0.0%	0.0
	〇あり計	1765	100.0%	83.3		〇あり計	3672	100.0%	71.0
	〇なし計	939	53.2%	44.3		〇なし計	1377	37.5%	26.6

次に、携帯メールとLINEにおける終助詞の出現傾向を表2に示す。表2から、終助詞が付いたものに限って見ると、携帯メールとLINEでは用例全体の調整頻度に約1.7倍の差があることがわかる（NUCCとCEJCの結果も参照すると、携帯メール＞対面会話＞LINEという並びになる）¹⁰。一方、終助詞が付かない〇に関しては僅かながらLINEの方が携帯メールより調整頻度が高いことが読み取れる。先に述べた通り1対1の会話のみ含むNUCCのデータと半数以上が3人以上による会話であるCEJCのデータでは、前者の方が〇が多いことを踏まえると（仮にそのような人数と終助詞の出現傾向の関係が確かにあるとしても）、1対1の談話のみ含む携帯メールと半数程度が3人以上による談話であるLINEでは対面会話と別の傾向があるものと捉えられる。また、個別の語のうち特に「よね」は相対的に携帯メールで多いが、調整頻度、順位ともにNUCC及びCEJCよりは低い。これらをまとめると、対面会話を基準として、携帯メールでは終助詞全体の増加が、LINEでは終助詞全体の減少が、それぞれ見られるが、両者ともにすべての語が一律に増減するわけではないと言える。

以上を踏まえ個々の用例を詳しく見ると、〇に関しては品詞別で動詞と形容詞に付く場合に関して、携帯メールとLINEで前接要素全般の調整頻度に違いが見られ（【動詞】携帯メール：3.7例／LINE：6.4例、【形容詞】携帯メール：3.2例／LINE：6.8例）、具体的な現れ方としてはLINEで特に(3)(4)のような一語文の増加が観察された（調整頻度は携帯メール：1.3例／LINE：4.0例）¹¹。また、「よね」に関しては認識の確認に関わらない(5)のような用例の出現全体に占める割合がLINE、携帯メールともに対面会話より高い様子が見られた（携帯メール：27.1％／LINE：17.3％）。但し、「よね」全体は両者ともに対面会話より少ないことから、そのような傾向は認識の確認に関わる用例が少ないことを反映したものと解釈できる。

(3) (知人Iと一緒に写真に写る人物について)

A：死相みえてるw

B：やばいよな

A：やばい

B：Iさんが活き活きしてるから際立つ

(LINE, 005)

(4) (必修の授業について)

A：先生違うよねー

A：やってることも違うのかー

B：違う

B：Cでしょ？

A：せやで

(LINE, 010)

(5) (談話の始発部で)

A：今度、カラオケ行かない(´_`)?

B：いいねえ～。でもなあ、今お金ないんだよね…来月くらいなら大丈夫なんだけど(´-`;))

A：ホントに(´_`)?じゃあ、来月行かない(´^)?

(携帯メール, 2004, 28-30)

4. 考察

ここでは、各データにおける〇及び「よね」の現れ方について、メディアの機能と結びつけて考察する。まず、ふたつの形式のうち認識の確認に関わる「よね」の、携帯メール及びLINEでの相対的な減少は「話しことば」と「打ちことば」における時間の共有のあり方から捉えられる。話し手と聞き手が時間を共有する対面会話では何らかの確認要求に対して、

¹⁰ なお、LINEのデータを1対1の談話に絞った場合の調整頻度は30.3例であった。

¹¹ 助動詞の終止形に何も付かない（＝〇が付く）ものの調整頻度は携帯メールで32.0例、LINEで31.2例であり、あまり差が見られなかった。その要因の一端には、そもそも単独で現れ得るものが限られることがあると思われる。一方、対面会話の結果はNUCCで20.3例、CEJCで15.6例であり、携帯メールとLINEより少なかった。このことから、携帯メールとLINEでは単なる事実説明や宣言等、必ずしも聞き手目当てではない形式が相対的に多いことが窺える。

直ちに反応がなされることを見込めるが、時間の共有が基本的になされない携帯メール及び LINE ではそのような対応の見込みを立てにくい。そのため認識の確認を基調としたやりとりは行いにくいと言え、「よね」の減少はこの点から理解できる。但し、携帯メールと LINE におけるそのような時間の非共有は、それ自体所与の特徴ではなく¹²、主要なモードが文字であり、記録性が高いというメディアの機能から生じる問題と言える。実際、両者の間でも、「よね」の出現傾向に若干の違いが見いだされることは（少なくとも参加者の意識の上で）時間の非共有が相対的なものであることを示唆する。

次に、以上のような携帯メールと LINE の違いは $\emptyset$ を含むその他の形式からも確かめられる。特に LINE で一語文が多いことや終助詞全体の出現が少ないことはターンの相対的な短さを示唆しており、（少なくとも利用者の意識の上で）素早いやりとりが求められることと結びつけて理解できる。一方で、携帯メールで相対的に終助詞が多い実態はそのような要請が乏しいと推測することで統一的に説明を行える。また、仮にそのような推測が確かであれば、両者の違いの背後には i) 表示形式（スレッド形式／チャット形式）に起因して複数の発信を同時に参照できるかどうか（少ない操作でやりとりの展開を追えるかどうか）違いがある点と、ii) 既読表示機能（自らの発信が他者の端末で開かれたかどうか示す機能）に起因して他者の行動を窺えるかどうか違いがある点の、少なくとも 2 点の機能の違いがあるものと思われる。

5. まとめ

本研究では、2000 年代の携帯メールと 2010 年代の LINE 及び、それらと概ね同時期の対面会話における終助詞の使用を観察し、各データで $\emptyset$ と「よね」の出現傾向に違いがあることを示した。また、特に携帯メールと LINE におけるそれらふたつの形式の現れ方を踏まえると、認識の確認という行為と、メディアの機能（表示形式・既読表示機能）に起因するターンの長さや時間共有のあり方との結びつきを見いだせることを論じた。一方で、そもそもデータの母数に限りがあることや既に終わったやりとりを扱う方法上の制約にも起因して、未だ十分な裏付けを得られていない論点も少なくない。今後とも幅広い要素に目を向けることで、メディアの機能と言語使用の関係について体系的な分析を行っていきたい。

参考文献

- 藤村逸子・大曾美恵子・大島ディヴィッド義和 (2011). 会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究 藤村逸子・滝沢直宏(編) 言語研究の技法—データの収集と分析— ひつじ書房 pp. 43-72.
- Herring, S. C. (2007). A faceted classification scheme for computer-mediated discourse. *Language @Internet*, 4, article 1 <<https://www.languageatinternet.org/articles/2007/761>> (2020 年 1 月 3 日) .
- 加納なおみ・佐々木泰子・楊虹・船戸はるな (2017). 「打ち言葉」における句点の役割—日本人の大学生の LINE メッセージを巡る一考察 人文科学研究, 13, 27-40.
- 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉 (2019). 『日本語日常会話コーパス』 モニター公開版—コーパスの設計と特徴— 国立国語研究所日常会話コーパスプロジェクト報告書 3.
- 国立国語研究所 (1951). 現代語の助詞・助動詞—用法と実例— 秀英出版
- 近藤泰弘 (1993). パソコン通信のメッセージの伝達様式—電話・手紙・ファックスと対比して— 日本語学, 12(13), 48-54.
- 三宅和子 (2005). 携帯メールの話しことばと書きことば—電子メディア時代のヴィジュアルコミュニケーション— 三宅和子・岡本能里子・佐藤彰(編) メディアとことば 2 ひつじ書房 pp. 234-261.
- 三宅和子 (2006). 携帯メール分析共有データ 2003 年度版, 2004 年度版, 2005 年度版 文部省科学研究費補助金研究成果報告書 携帯電話利用が若者の言語行動と対人関係におよぼす影響に関する調査・研究 (課題番号: 15520271) , 67-145.
- 落合哉人 (2019). LINE テキストチャットにおける分析単位の規定と接続表現の使用傾向 筑波日本語研究, 13, 83-112.
- 岡本能里子・服部圭子 (2017). 雑談のビジュアルコミュニケーション—スタンプ機能に着目した相互行為分析を中心に— 柳町智治・岡田みさを(編) インタクションと学習 ひつじ書房 pp. 129-148.
- 佐竹秀雄 (2005). メール文体とそれを支えるもの 橋本良明(編) 講座社会言語科学 2 メディア ひつじ書房 pp. 56-68.
- 田中弥生・柏野和佳子・角田ゆかり・伝康晴・小磯花絵 (2018). 『日本語日常会話コーパス』の構築—会話収録法に着目して— 国立国語研究所論集, 14, 275-292.
- 田中ゆかり (2014). ヴァーチャル方言の 3 用法—「打ちことば」を例として— 石黒圭・橋本行洋(編) 話し言葉と書き言葉の接点 ひつじ書房 pp. 37-55.

¹² 近藤(1993)は、メールやチャットを含む「パソコン通信」について論じる中で、メッセージを書いた時刻と読む時刻が同時でないこと（非同期性）と、メッセージの送受信が同時であること（即時性）を分けている。両者のうち即時性はメディアの機能に絶対的に規定される特徴であるが、非同期性は機能を踏まえた利用行動の問題であり、相対的な特徴と言える。実際、携帯メールや LINE でもそのように意識すれば、同期的なやりとりを行うことはできる。